

日本語の主語的実体の多様性について 張 テイ

日本語において、主語は長年にわたって議論されてきたテーマである。現在、日本語研究者の間では、尾上圭介(2004)「主語と述語をめぐる文法」(北原保雄[監修] 尾上圭介[編]『朝倉日本語講座6:文法Ⅱ』1-57 朝倉書店)などの主語が必要であるという意見と、三上章(1969)『象は鼻が長い(改訂増補版)』(くろしお出版)などの、主語が必要ではないという意見と、依然として二極に分かれている。発表者は、主語をめぐる長年にわたる議論について、それぞれの主張が成り立つ視点が異なっているだけなのではないかと感じる。そこで本研究は、いくつか重要な先行研究が成り立つ視点を整理することを通じて、主語的実体を考える。分析する際、形態・構文・意味などのいずれかの単一の視点に立たず、複数視点に立って主語現象の広がり捉えることの重要性・有効性を示す。

本研究は、日本語の主語的実体を探るのに、文の意味・構造から離れることはできないと考えている。そのため、分析の前提として、日本語の文を分類する必要がある。分類に当たっては、馬真(1997) 鳥井克之 編訳『簡明実用中国語文法:初級から上級までの文法参考書』(駿河台出版社)を参考に、日本語の文を大きく「非主述文」と「主述文」に分ける。そのうえさらに、「主述文」を「一語文」と「非一語文」に分け、「主述文」を「非完全主述文」と「完全主述文」に分ける。これらの文型をベースに、主語的実体の多様性及び連続性を論証する。

日本語において、「非主述文」は主語的実体を持たず、「主述文」は主語的実体が持てる。また、「主述文」において、「主題主語」「外延主題主語」「主格主語」「主格目的語」「斜格主語」という、主語的実体の多様性が見られる。これらの主語的実体は、「意味」「形態」「格」「主述構造」「主題」という5つの要素と関連している。これらの要素の抜け落ちる具合によって、様々な主語的実体がどのように連続性を成しているかが見えてくる。